

Inspiration-Times

Vol.1

法隆寺は宇宙人を祭っていた？

聖徳太子と呼ばれて来ました。

六月某日大阪難波よりJRにて奈良県法隆寺駅まで行く。駅構内にある案内所にて法隆寺への行き方を尋ねる。「バスでも行けますよ。」と教えてもらうが、ここは街の雰囲気も知りたいので「歩いていきます。」と地図と共に道順を教えてもらい、駅を出る。

外はどんよりした曇り空で今にも雨が降りそうである。小さな商店街を通り抜け歩くこと十分、雨が降り出した。傘をさし、標識に従いしばらく歩いていくと松林の道が現れ、その向こうに南大門が見える。この道を聖徳太子はかつて歩いていたのであるかと感慨に浸りながら、大門に向かう。

門の手前で手と心を洗い、いよいよ西院伽藍に入る。そこにはテレビや雑誌で見るままの光景が広がっていた。



六重？に見える五重の塔

回廊の軒に滴り落ちる雨を通して見る五重塔と金堂は美しい。法隆寺ほど雨の似合うお寺はないのではないかとと思う。太子も雨の日にはこの雨だれを見ながら物思いにふけることもあっただろう。

そしていよいよ金堂に入る。薄暗さの中に四天王の一体を見てその歴史を感じながら、正面に進む。そしてそこにある釈迦三尊を見て絶句した。「エンキだ！」思わず叫びそうになってしまった。記者は最近セガリア・シツチンの「人類を創成した宇宙人」(徳間書店)を読んだのであるが、シュメールの粘土板・筒印章に描かれたエンキ(ネフィリム)の姿が目の前にあった。この時代の仏像はペルシヤやゾロアスターの影響を受けていると言われるが……。それにしてもエンキとは！



金堂内にある釈迦三尊像。古代ペルシヤの影響というよりも……

どうみてもキリスト教絵画

西院伽藍を出て綱封院・食堂の赴きある建物を見ながら大宝蔵院に入る。建物に入ってすぐに巨大な絵画を目の当たりにし、再び目を疑る。

「何故こんなところにキリスト教の絵があるのだ？」

その絵画は和田英作が大正七年に描いた「金堂落慶之図」で、天平時代の金堂を想像して聖徳太子らが描かれているのだが、その描写はキリストとそ

の使徒が描かれているように見える。聖徳太子の本名は厩戸豊聡耳皇子であり、馬小屋前で生まれたという出生伝説はキリスト誕生と重なる。

果たして法隆寺に隠された秘密とはいかなるものなのであろう？

スピリチュアルな斑鳩神社

法隆寺から北西に歩いて十分のところに斑鳩神社がある。菅原道真公が祭られた天満宮である。

法隆寺とは打って変わってひっそりとしたところであるが、とても神秘的な雰囲気を持つ神社である。訪れる価値あり。



斑鳩

斑鳩とは全長二十センチ程度のスズメ目アトリ科の小鳥だ。うだ。

けれども筆者がまず最初にイメージしたのは「ガルダ」である。ガルダ(ガルダ)とはインド神話に登場する炎の様に光り輝き熱を発する神鳥のことである。

それはもしかするとかつて人間が誕生した頃、地球を支配していたであろうネフィリウムの乗り物であったかもしれない。

仏教では迦楼羅と書くのであるが、イカルガとガルダ(カルラ)何処となく通じるものがあるような気がする。そのように想像を膨らまして見るとまた法隆寺の謎は深まるばかりである。(参考:ウィキペディア)